

農業の新しい技術

No.634 (平成22年5月)
分類コード 02 - 04
熊本県農林水産部

春メロン代替品目としての無加温半促成 ニガウリの省力短期間多収栽培法

農業研究センター い業研究所作付体系研究室
担当者：岩本英伸

研究のねらい

ニガウリは近年需要が増加しており、また、無加温栽培が可能で、収益性が低下している春メロンの代替品目の一つと考えられる。しかし、抑制品目と組み合わせる場合には、7月以降は土作りや土壌消毒を行う必要があり、ニガウリの収穫期間は限られる。そこで、短期間（6月末まで）に収量を確保するための省力的な栽培技術を開発する。

研究の成果

- 1．斜めに張ったネットを利用し、子づる4本仕立て（ネット上端で摘心）で栽培する場合、孫づる（放任）の本数は株あたり1本が適する（図1）。
- 2．収穫が終了した子づるは5月下旬から6月上旬にすべて下部で切断（除去せずそのまま放置）しても、混み合った部分を摘葉する場合と同等の収量が得られる（図2）。
- 3．子づるを切断する場合の5月下旬以降の茎葉管理のための作業時間は、混み合った部分を摘葉する場合に比べおよそ70%短縮される（図2）。

以上のことから、図3に示す栽培法により4月下旬～6月末に10aあたり5.5～7t程度の可販果収量を得ることが出来る。

普及上の留意点

- 1．本試験は1月10日前後播種、2月10日前後定植の半促成栽培（南北方向単棟無加温ビニルハウス、トンネル1重、施肥量N、P₂O₅、K₂O各3.0kg/a）で実施した。
- 2．本栽培法は「熊研BP1号」、「えらぶ」等の雌花節率の高い品種に適する。雌花節率の低い品種は過繁茂となるため適さない。
- 3．7月以降になると過繁茂となり摘葉等の管理作業が新に必要となるため、6月末を目途に栽培を終了する。
- 4．子づるは雌花の開花が多く着果過多による草勢低下を招きやすいので、平成19年度農業の新しい技術「県育成ニガウリF₁品種「熊研BP1号」の半促成作型における安定多収のための着果技術」を参考に着果制限を行う。その後は充実した雌花を選んで着果させる。
- 5．本栽培法では果実をネットの下方（東側）に引き出すための労力が必要である。

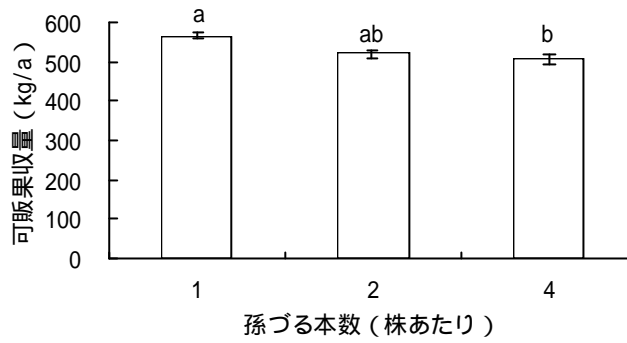


図1 孫づる本数が可販果収量に及ぼす影響 (2007年)
 供試品種は‘熊研BP1号’、収穫期間は4月24日～6月29日、縦線は標準誤差 (n=3)、異なるアルファベット間にはTukey法による5%水準の有意差あり

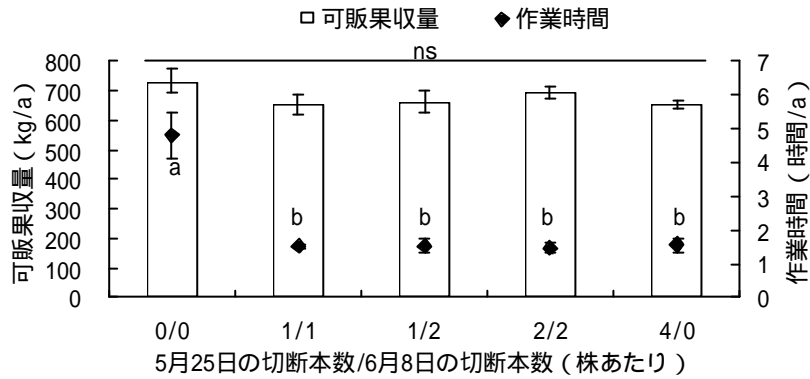


図2 子づるの切断本数および時期が可販果収量および茎葉管理のための作業時間に及ぼす影響 (2009年)
 供試品種は‘熊研BP1号’、収穫期間は4月24日～6月30日、子づるはおよそ30cmの高さで切断し放置した、0/0区のみ混み合った部分を摘葉した、作業時間は5月25日以降の合計、縦線は標準誤差 (n=3)、nsは5%水準で有意差なし、異なるアルファベット間にはTukey法による5%水準の有意差あり

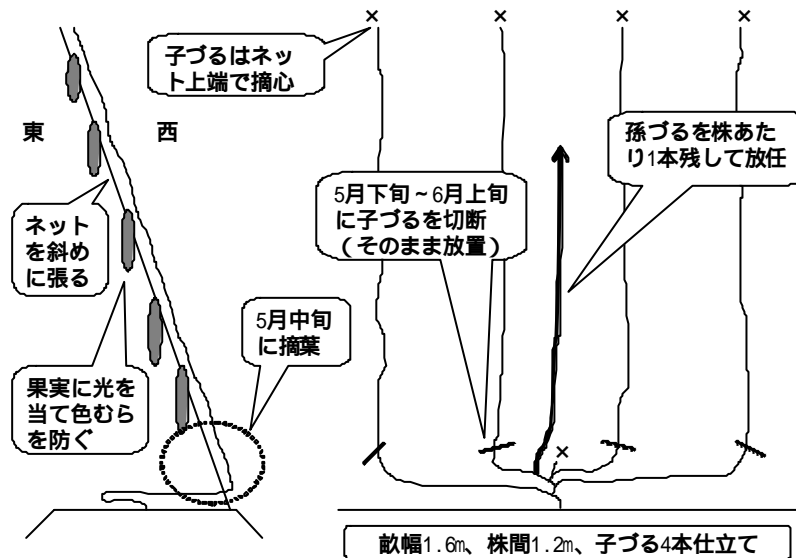


図3 短期間省力多収のための栽培法